

られて居るのであるから、必らず何等かの手段によりてその結末を付けなければならぬ場合になつて居る、されば此の當時は兩國の關係は極めて危殆の状態に陥つて居つたものと見なければならぬ、然るにまた此の差し迫まつた局面に一轉機を生ぜしむべき事情が生じて來た、明の太祖洪武帝の崩御これである。

洪武三十年閏五月に太祖崩じ、建文帝位を嗣いだが、翌建文元年には既に燕王の叛が生じて、西域地方の問題の如きは到底顧慮する暇なく、只管内亂の戡定に従事する有様であつた、さて此の消息が帖木兒の許に達したのは、建文元年に當る一三九九年の終り頃であつた、此時は帖木兒は既に印度のデリーを陥れて、四月に一旦撒馬兒罕に歸り、暫時の休養を貪ぼつたが、不幸にして西の方波斯を總督して居つた一子ミラン、シャ一の過ちによつて、其の地方一帯に亘つて叛亂が生じて、今は帖木兒自身之を征伐しなければならぬ様な破目になつて來た、そこで十一月にはまた軍を率ゐて西に發し、カラバグ（裏海の西、タブリツ市の北方）に至つて諸王將の出迎を受け、こゝから兵を出して征討に従事させ、自からは冬を茲にすごして四方の形勢に注目して居たが、丁度此の際に支那の情報が彼の陣營に到達したのであつた、戦勝記によると王が此處に駐まつて居た時に、國家の利益となるべき種々の情報に接したとして、「永く世を治めた偶像崇拜者なる支那キタイの皇帝タングース、カンが死し、國內に争亂を生じたこと」をその中に數へて居る、タングース、カンとは此の頃中亞で支那の皇帝を貶稱した言葉で「豚王」の義なるトルコ語である、かゝる報知に接したので「事情に鑒みてヂオルデア侵入を決定した」（戦勝記）のであつたが、此の後引き續き此の方面の軍事にかゝらつて、再び都に引き返したのは五年目の後であつた、彼をしてかく意を西方にのみ用ひしめたのは、東の方を顧慮する必要がなかつたからのことで、もし支那の情報がカラバグ滯營中に來